

## 場面ごとのためらい（躊躇）に作用する異なる要因の差異

— 特性不安と意思決定、行動習慣による複合要因の検討 —

Differences in Factors that Influence Hesitation on Different Occasions:  
A study on combined factors of trait anxiety, decision making and behavioural habits

鈴木賢男\*

Masao SUZUKI

**要旨：**本研究は、大学生75名を対象者として、自由回答による記述の類型をもとにした24項目のためらい場面項目と、意志決定時の意識と日常行動の習慣、特性不安尺度についての因子構造を分析した後、ためらい場面で時間をかける程度を目的変数とし、因子分析の結果から尺度として算出したそれぞれの因子を説明変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、全体では、意思決定時に「緊張維持志向」をとって先を気にしたり、特性不安の「非充足感」で現状が十分に満ち足りていないと、比較的長くためらうことになる可能性があることなどがわかった。また、場面が異なれば、その他の作用が有効になることも窺われ、比較的ネガティブな場面である「課題負担状況」や「損失懸念状況」では「自己離脱傾向」の少なさが、ためらいの時間を長くすることに影響をもたらすことが示唆された。

**キーワード：**Hesitation, Trait anxiety, Decision making, Undergraduate student

### はじめに

ためらいと葛藤が関連のある概念であることは予想されるものの、明確な定義によって、その関連性が説明されている先行研究はほとんどないようである。佐久間（2009）は、「決断から実行にかけての移行がスムーズかを示す」尺度を「躊躇性」としており、決断しても実行段階に移行しない問題のあることを指摘している、葛藤は、心理学における「心の中に相反する欲求が同時に起こり、そのどちらを選ぶか迷うこと」との意味で、両価的で決定すること自体に至れない状態として考えることができる。しかしながら、これだけでは関係性がはっきりしない。そこで、一つの仮定に留めておきたいが、筆者は次のようなモデルケースを考えようと思う。行き先がB駅かC駅かで決まらない「葛藤」状態でも電車に乗ることはできるのに、A駅から電車に乗ろうとしないことを「ためらい」の一つと考え、更に、乗車後に降りる駅が決まって「葛藤」状

\*すずき まさお 客員研究員・文教大学人間科学部（非常勤）

態が解消できそうに思われても、降りようとしないうるのが、もう一つの「ためらい」だと考えてみる。そうすると、少なくとも、同一状況での関連づけが得られそうであり、葛藤に至ろうとしないためらいと、葛藤から抜けようとしないうるためらいが成立可能になるとされる。論考としては不十分だが、この仮定を踏まえた上で、決定や実行という次段階プロセスへの移行（先に進める）に対する心理的な抵抗が、ためらいの問題の本質にあると考えているところである。

鈴木（2016）は、大学生67名を対象者として、自由回答による記述の類型をもとに、24項目のためらい項目を作成して、意志決定時に意識する内容についての20項目と特性不安尺度との関連を調査した。その結果、ためらいの場面で時間をかける傾向にある人ほど、特性不安が高いことや意志決定時に反応が停滞（鈴木 2016の減退から訂正）する志向性（例、時間確保）が高いことなどがわかった。そこで、本研究では、新しく日常の行動習慣を調べる項目を用意し、特性不安、意思決定、行動習慣におけるどの要素がためらいに作用するかを分析することとした。また、異なるためらいの場面では、異なる要素が作用するかを、確かめてみることにした。

## 方法

### 1. 質問紙調査法

A3一枚の用紙で、表裏に印刷した見開きの質問紙を作成した。内容は次の5点であった。

鈴木（2016）では、最も強くためらいを感じた場面として回答された自由記述の分析（鈴木、2008）による11類型から、類型ごとに2つの特性を抽出して、計22項目を作成した。これには、学業面での試験とレポートへの着手の2項目が加えられて計24項目となるが、因子分析の過程で、共通性が比較的低い3項目が除外された。そこで今回は、「忘れ物を見つけたとき、それを届け出るかどうか」「自分の悩みを、最も親しい人に打ち明けるかどうか」「知合いに秘密にしていることを暴露するかどうか」の新たな3項目を付け加えて、「以下のことを決断するまでに時間をかける方だと思いますか。自分に当てはまる程度を回答してください。」との教示文を示した後、「かなり時間をかける～ほとんど時間をかけない」までの5件法で評定してもらった。

次に、鈴木（2016）と同様に、新版STAI Y-2（肥田野他、2000）より問番号21～40の特性不安に関する20項目を用い、ランダムに配置しなおした上で、「次の1から20までの文章を読んで、あなたがふだん、どう感じているか、最もよくあてはまる箇所（番号）を各項目の左の欄から選んで、○で囲んでください。あまり考えこまないで、あなたがふだん、感じている気持ちを一番よくあらわしているものを選んでください。」との教示文の後に、「ほとんどいつも」「たびたびある」「ときどきある」「ほとんどない」の4件法で回答を得た。

その次に、鈴木（2016）にて、ためらいの諸特性を調査するために考案した計20項目を用い、「何かを決めなければいけない場合、以下の項目に、どの程度当てはまると思いますか。当てはまる程度をお答えください。」と教示後に、「かなり当てはまる～全くあてはまらない」までの5件法で評定してもらった。今回は、「何かと決めるのに迷いやすい」を「しばらく頭がぼーとなるような感じがする」、「落ち込みやすい」を「心理的な負担を感じやすい」、「先の先までを考えてしまいやすい」を「先の先までの展開を考えてしまいやすい」に変更した。

最後に、日常の行動習慣を調査するために、例えば「玄関の鍵をしめたかどうか気がなる」などの計20項目を用いて、「普段の生活で、以下の項目に示された状態が、どの程度あると思いますか。」と教示を入れた後に、「よくある～全くない」までの5件法で評定をしてもらった。

## 2. 対象者

調査対象者は、文系大学生75名で、男性は28名、女性は46名、不明が1名であった。平均年齢は、全体で19.1才 (SD=0.72)、男性で19.3才 (0.90)、女性では18.9才 (0.55) であった。

## 3. 手続き

2017年1月の筆者担当の授業の試験後に一斉に調査用紙を配布し、その場で回答してもらい、退出時に回収をさせてもらった。調査に要した時間は、概ね10～15分程度であった。

## 分析

ためらい場面で、決断するまでにかける時間の程度を回答してもらった24項目について、固有値減衰率の状態から、抽出する因子数を5因子に固定して、最尤法による因子分析を行った後、回転バリマックス解を得た (累積寄与率37.8%)。

Table 1. ためらい場面に対するバリマックス回転解因子負荷量

項目内容	F1	F2	F3	F4	F5	h <sup>2</sup>
B_06 最終的な進路先を絞り込むかどうか	.67	-.10	.27	.08	.05	.54
B_13 責任ある仕事 (係) を引き受けるかどうか	.62	.06	.18	-.09	.22	.47
B_09 複数の候補からある一つを選べるかどうか	.60	.10	.05	.01	-.05	.37
B_02 ケンカしてしまった後、仲直りするかどうか	.46	.02	-.02	-.08	.24	.28
B_07 やりたいと思っていることを、実際に始めるかどうか	.42	.05	.02	.17	-.25	.27
B_01 上手くいってない状態で、別れを切り出すかどうか	.33	-.06	.20	.17	-.19	.22
B_12 達成困難な場合に、ある程度で妥協するかどうか	.32	.02	.02	.28	-.08	.19
B_21 テスト前の勉強にいつ取り掛かるかどうか	-.04	.86	.03	.04	.09	.74
B_23 課題レポートにいつ取り掛かるかどうか	-.03	.83	.00	.08	.01	.69
B_08 苦手なことに取り掛かるかどうか	.18	.60	.06	.04	.06	.40
B_17 人前で、自分の意見を言うかどうか	.05	.03	.63	.31	.06	.50
B_05 気に入った商品を実際に購入するかどうか	.40	.07	.57	.01	-.08	.50
B_16 新しい環境に、進んで馴染もうかどうか	-.15	.02	.53	.15	.19	.37
B_14 高価な商品を買うかどうか	.14	.05	.46	-.05	.00	.24
B_04 好きな人ができたとき、告白するかどうか	.16	-.08	.39	.00	-.21	.22
B_20 異性のすぐ近くに座っていいかどうか	-.08	-.12	.18	.67	.18	.54
B_24 欲求に身を任せて行動してもいいかどうか	-.03	.35	-.08	.54	-.04	.43
B_03 公のために自分を犠牲にできるかどうか	.15	-.02	.40	-.43	.14	.39
B_11 思いもよらない不幸な事実を受け入れるかどうか	.15	.02	.09	.37	.23	.22
B_10 知合いに秘密にしていることを暴露するかどうか	.15	.11	.12	.35	.05	.18
B_18 忘れ物を見つけたとき、それを届け出るかどうか	.03	-.12	-.11	.23	.66	.51
B_15 人前で、他の人に親切にするかどうか	.18	.03	-.04	.09	.52	.31
B_19 自分の悩みを、最も親しい人に打ち明けるかどうか	.02	.18	.27	.07	.46	.32
B_22 長い間続けてきたことを、やめる必要があるかどうか	.13	-.07	-.03	.05	-.38	.17
寄与率	9.044	8.44	7.621	6.446	6.205	

Table 1 に表した回転解の因子負荷量の値から、F1因子を構成する項目が「最終的な進路先を絞り込むかどうか」「責任ある仕事 (係) を引き受けるかどうか」のように、決定後により良い結果が期待できるか気になっている状況であると考えられたので、「効果期待状況」( $\alpha = .68$ ) と命名した。F2では、「テスト前の勉強にいつ取り掛かるかどうか」「課題レポートにいつ取り掛かるかどうか」のように、やるべき課題に負担を感じている状況と考え、「課題負担状況」( $\alpha = 0.80$ ) とした。F3では、「人前で、自分の意見を言うかどうか」「気に入った商品を実際に購入するかどうか」のように、不確定な成否が気になっている状況と考え、「成否対極状況」( $\alpha = 0.64$ ) と命名した。F4は、「異性のすぐ近くに座っていいかどうか」「欲求に身を任せて行動してもいいかどうか」のように、自分の素直な気持ちを持つこと自体に問題がないか気になっている状況と考え、「欲求容認状況」( $\alpha = 0.53$ ) と名づけた。F5は、「忘れ物を見つけたとき、それを届け出るかどうか」「人前で、他の人に親切にするかどうか」のように、損失があったとしても仕方がないと思えるかどうか気になっている状況と考え、「損失懸念状況」( $\alpha = 0.58$ ) とした。本研究

における因子構造は、「課題負担状況」（以前の難関負荷状況）については、鈴木（2016）とほぼ同一だったが、共通性には比較的低い値を示すものが多く、項目ごとの独自性が高いことなどが影響したことで、全体として因子を構成する項目がほぼ一致しているとまでは言いにくくはなっていた。しかし、それぞれの因子が意味する内容は、十分に了解することは可能であった。

次に、意思決定時に意識する内容を評定してもらった17項目について、固有値減衰率を基準とした最尤法による因子分析を実施した結果、3因子を抽出してバリマックス回転解が得られた（累積寄与率46.1%）。固有値1.0以上基準による事前分析で、因子間での因子負荷量が近似した「なかなか一歩が踏み出せない」「何かと気が引けてしまうことが多い」「しばらく頭がぼーとなるような感じがする」の計3項目を20項目中から除外していた。一つ目の因子を構成する項目は、「先の先までの展開を考えてしまいやすい」「想定外に生じることを想像しやすい」などで、状況の変化を先読みしようとしていることを意味するものと考え、「緊張維持志向」（ $\alpha = 0.78$ ）と名づけた。次の因子では、「いろいろと気がかりなことがある」「不備な点はないかと気になることが多い」などで、事前に考慮すべきことに気づこうとすることを意味するものと考え、「問題確認志向」（ $\alpha = 0.83$ ）と命名した。最後の因子では、「決断はできるだけ後半まで引き延ばす」「速く決める必要がある状況は苦手なほうだ」などで、とにかく時間を確保することを表していると判断し、「時間確保志向」（ $\alpha = 0.78$ ）とした。この因子は、鈴木（2016）にも見られ、「問題確認志向」は不確実志向、「緊張維持志向」は失敗回避志向と構成項目が比較的共通していた。

その次に、日常の行動習慣の頻度を評定してもらった20項目について、固有値1.0以上を基準とした最尤法による因子分析で、バリマックス回転による因子負荷量の最大値が0.3を下回った「玄関の鍵をしめたかどうか気になる」を除いた後、固有値減衰率を基準として4因子を抽出し、新たに0.3を下回った「電車には、駆け込み乗車をしがちである」「同時に複数のことをすることが多い」「周囲がうるさくても気にせず勉強できる」の3項目を最終的に取り除いた。最後は、選定した16項目で、同様に因子分析を行って4因子での回転解を得た（累積寄与率37.8%）。

回転解の因子負荷量の値から、F1の因子を構成する項目は、「人と一緒にいると相手の反応が良いか気になる（.96）」「突然の誘いがあってもできるだけ応じる（.49）」などで、他者に気を配ることを意味しており、「他者配慮傾向」（ $\alpha = .62$ ）と名付けた。次に、F2では、「周囲の人が楽しんでいるのを見るのが好き（.90）」「自分のことよりも人のことを優先してしまう（.50）」となっており、自己に関心を払わないでいられる「自己離脱傾向」（ $\alpha = .51$ ）と命名した。F3は、「普段からじっくりと考えるほうだと思う（.48）」「行列に並ぶことはそれほど苦にはならない（.45）」は、状況に関わらず自己の状態を維持している「集中没頭傾向」（ $\alpha = .62$ ）と名付けた。最後に、F4は、「自分の身の回りの整理が行き届かない（.62）」「物を捨てることがなかなかできない（.60）」など、片付けないうちに次から次へと関心事を変えていくことを表していると考え、「関心拡散傾向」（ $\alpha = .58$ ）と名付けた。

最後に、特性不安の項目に関しては、鈴木（2015, 2016）とほぼ同じ結果が得られた。一つの因子は、「非平静感」と名付けられ、「気になることを考え出すと緊張したり混乱したりする」「つまらないことが頭にうかび悩まされる」のような項目を構成していた。他の因子は、「非充足感」因子では、「心が満ち足りている（逆転）」「しあわせだと感じる（逆転）」などを構成し、「非統制感」因子は、「落ちついた人間だ」「冷静で落ちついている」など、「非効力感」因子は、「困ったことが次々におこり克服できないと感じる」「力不足を感じる」などを構成するものとなった。

## 結果

本研究の分析で、ためらい場面に関して抽出された「効果期待状況」「課題負担状況」「成否対極状況」「欲求容認状況」「損失懸念状況」の5因子、意思決定時の意識に関する「緊張維持志向」「問題確認志向」「時間確保志向」の3因子、日常の行動習慣に関する「他者配慮傾向」「自己離脱傾向」「集中没頭傾向」「関心拡散傾向」の4因子、そして特性不安では、「非平静感」「非充実感」「非効力感」「非統制感」の4因子の全てにおいて、因子を構成する項目の評定を得点として、その平均値を尺度得点とした。

ためらい場面の全場面における評定の平均を全体の尺度得点として、これを目的変数とした重回帰分析を実施した。投入した説明変数は、上述の意思決定時の意識3尺度、日常の行動習慣の4尺度、特性不安の4尺度で、ステップワイズ法による結果をTable 2に示した。自由度調整済の決定係数は低いが、分散分析の結果5%水準で有意とされ、標準化回帰係数に有意なものがあることが認められた。有意な変数は、意思決定時の「緊張維持志向」0.25と特性不安における「非充足感」0.24であることがわかった。

また、ためらい場面の各場面尺度についても、それぞれを目的変数とし、同様に、意思決定時の意識、日常の行動習慣、特性不安の全ての尺度を説明変数として投入し、ステップワイズ法による解を求めた (Table 2)。いずれも、自由度調整済み決定係数は低いが、分散分析の結果では回帰モデルが成立することは認められ、「効果期待状況」においては5%水準で「時間確保志向」0.40が有意となり、「課題負担状況」においては5%水準で「自己離脱傾向」-0.24が有意、「成否対極状況」では「緊張維持志向」0.40が1%水準、「非充足感」0.25と「関心拡散傾向」-0.21が5%で有意であった。「損失懸念状況」では、5%水準で「自己離脱傾向」-0.29が有意と認められた。

Table 2. ためらい状況別の重回帰分析 (ステップワイズ法) で有意となった説明変数

目的変数	説明変数	標準化係数	t値	有意	決定係数	F値	有意確率
ためらい全般	緊張維持	0.25	2.13	*	$R^2 = 0.172$	$F(2,70) = 7.27$	$p < .05$
	非充足感	0.24	2.06	*			
効果期待状況	時間確保	0.40	3.72	*	$R^2 = 0.152$	$F(1,71) = 13.86$	$p < .001$
課題負担状況	自己離脱	-0.24	-2.08	*	$R^2 = 0.044$	$F(1,71) = 4.32$	$p < .05$
成否対極状況	緊張維持	.40	3.71	***	$R^2 = 0.288$	$F(3,69) = 10.72$	$p < .001$
	非充足感	0.25	2.30	*			
	関心拡散	-0.21	-2.11	*			
損失懸念状況	自己離脱	-0.29	-2.56	*	$R^2 = 0.071$	$F(1,71) = 6.54$	$p < .05$

\*は5%水準で有意、\*\*は1%水準で有意、\*\*\*は0.1%で有意であることを表す。

## 考察

ためらい場面全体に対して、「緊張維持志向」と「非充足感」に正の作用があることが示唆され、先がどうなるかわからないと身構えることと、現状での自分の満ち足りなさがある場合に、ためらいが経験されやすくなることが予見された。しかしながら、個別では、「課題負担状況」と「損失懸念状況」に対しては、「自己離脱傾向」に負の作用があることが示唆され、自分自身のことを構わずに抑えていられないと、比較的ネガティブな状況下ではためらいが経験されやすいこと、逆に、「効果期待状況」のような比較的ポジティブな状況下では「時間確保志向」に正の作用があることが示唆され、じっくり判断する傾向にあると、ためらいを経験しやすいと考えられた。

## 引用文献

- 肥田野直・福原真知子・岩脇三良・曾我祥子・C.D.Spielberger『新版STAI』実務教育出版 2000
- 佐久間夕美子・佐藤千史 日本語版Action Control Scale (J-ACS) の作成 日本保健福祉学会誌, **15** (1), 1-9, 2009.
- 鈴木賢男 感情体験の分析 (IX) —ためらいについて— 文教大学生生活科学研究所紀要「生活科学研究」**30**, 77-91, 2008.
- 鈴木賢男 ためらいと不安の構成要素間の関連 —選択場面における許容できる失敗度・損害度・負担度— 第78回日本心理学会発表論文, 3EV-098, 2015. 9. 24.
- 鈴木賢男 ためらい場面での時間的要求と特性不安の主要因との関連 —意志決定時に反応を弱める機能としての検討— 文教大学生生活科学研究所紀要「生活科学研究」**38**, 173-178, 2016.